

岐阜方言における持続体系の変遷

鴨井 修平

西日本諸方言の持続形式である YORU と TORU に関して、従来の研究では個別方言における両形式のAspect機能の詳細が数多く記述されてきた。それと並行的に、個別方言では持続形式がポライトネスを標示するという現象も観察されている。しかし、持続形式が標示するAspectとポライトネスの関係については不明瞭な点が多く、研究蓄積は不十分である。本稿では、統一した枠組みに基づいて記述した岐阜方言のデータより、岐阜方言における持続形式 YORU (-jo.r-)・TORU (-tor-)・TERU (-te=(i)-) のAspect機能を分析し、岐阜方言全体における持続体系の変遷を明らかにした。また、同じAspect上において併用される TORU と TERU の間では、TORU が聞き手に対する [-配慮]、TERU が聞き手に対する [+配慮] を標示するというポライトネス対立が生じているということを明らかにした。なお、本稿では、持続形式がポライトネスを標示する現象には、2つの方言コード間におけるコードスイッチングが関与していると考えられる。

1. はじめに

本章では、AspectおよびAspectを標示する文法形式における研究背景を示し、岐阜方言の持続形式から観察される現象に基づいて問題提起を行う。

1.1 研究背景

命題の時間構造を捉える文法範疇のことをAspect(相)という。命題の時間構造は、従来のAspect研究(e.g. Vendler 1967, Comrie 1976, 金田一 1950, 奥田 1978)を参考にすれば、図1のように図示することができる。



図1 命題の時間構造

図1より、時間(time)が左から右に向かうと

すると、命題の時間構造は開始点(beginning=b)、終了点(ending=e)という2つの参照点によって区画される。また、この2つの参照点によって区画される命題は、未然相(prospective=PROSP)、進行相(progressive=PROG)、結果相(resultative=RES)という持続性を持った3つのAspectから構成される。例えば、「太郎が魚を食べる」という命題は、時間の経過に伴い、太郎が食卓に着く(未然相)→太郎が魚を咀嚼する(進行相)→太郎が魚を食べ終え、魚の骨が残る(結果相)というような局面を経る。標準語の持続形式においては、「今、魚を食べている」、「既に、魚を食べている」のように、進行相と結果相を標示するテイル(-te=i-)が使用される。

『方言文法全国地図第198図』(国立国語研究所 1999)によれば、使用する持続形式は、西日本側と東日本側で大きく異なっている。

図2は、「(桜の花が今) 散っている」という進行相の局面において、東日本側(分割線右側)には「散ってる」という表現が統一的にあるのに対し、西日本側(分割線左側)には「散りよる」、「散っとる」、「散ってる」という表現バリエーションがあることを表している。つまり、Aspectを標示する持続形式として、東日本側には TERU



図2 アスペクトの表現方法における東西境界

(*-te=(i)-*) という1形式が分布しているのに対し、西日本側には YORU (*-jor-*)、TORU (*-tor-*)、TERU という3形式が分布しているということである¹。

東日本諸方言は、TERU が進行相と結果相を標示するため、1形式が2つのアスペクトを標示するという点で標準語との類似点を持つ。一方、西日本諸方言は、YORU が進行相、TORU が結果相を標示するため、2形式が2つのアスペクトを区別するという点で標準語との相違点を持つ。例えば、(1a) は進行相、(1b) は結果相を標示する際の高知方言話者の発話である。

(1) a. taro: sakana tabe-ju:.

太郎 魚 食べる -YORU
「太郎 (が) (今) 魚 (を) 食べている」

b. taro: sakana tabe-teu:.

太郎 魚 食べる -TORU
「太郎 (が) (既に) 魚 (を) 食べている」

従来の方言アスペクト研究では、このような西日本諸方言の YORU と TORU のアスペクト機能について数多く議論されてきた (cf. 工藤 2014)。

¹ 西日本諸方言の持続形式 *-jor-* と *-tor-* には音声バリエーションがある。例えば *-jor-u* の音形には [-jo:r-u]、[-jo:]、[-ju:] など、*-tor-u* の音形には [-teor-u]、[-to:]、[-teu:] などがある。本稿では、議論の便宜上、例文を除き、*-jor-u* の音形を全て YORU、*-tor-u* の音形を全て TORU と表記する。それに伴い、音形バリエーションのない *-te=(i)-ru* も TERU と表記する。

1.2 問題提起

東日本諸方言と西日本諸方言の接触方言区域に所属する岐阜方言もまた、持続形式 YORU と TORU が分布する方言である。しかし、岐阜方言において進行相を標示する際、北部に位置する高山市出身の方言話者は、YORU と TORU の2形式を併用するのに対して、南部に位置する岐阜市出身の方言話者は、TORU と TERU の2形式を併用するという現象が観察される。(2) は高山市方言話者、(3) は岐阜市方言話者の発話である²。

(2) taro: hasiri-jor-u. / hasit-tor-u.

太郎 走る -YORU-NPST / 走る -TORU-NPST
「太郎 (が) (今) 走っている」

(3) taro: hasit-tor-u. / hasit-te=(i)-ru.

太郎 走る -TORU-NPST / 走る -TERU-NPST
「太郎 (が) (今) 走っている」

ここで、進行相を標示する際に併用される2形式の間に意味的な対立はあるのだろうかという問題が生じる。さらに、岐阜市方言においては、アスペクトではなく、聞き手の属性によって TORU と TERU を使い分けるといった現象も観察される。例えば、(4a) は仲の良いクラスメイト、(4b) は転校生に対する岐阜市方言話者の発話である。

(4) a. taro: hasit-tor-u. / ?hasit-te=(i)-ru.

太郎 走る -TORU-NPST / ?走る -TERU-NPST
「太郎 (が) (今) 走っている」

b. taro: hasit-te=(i)-ru. / ?hasit-tor-u.

太郎 走る -TERU-NPST / ?走る -TORU-NPST
「太郎 (が) (今) 走っている」

しかし、TORU と TERU が、どのような意味素性に基づいて対立しているのかは不明瞭である。なお、高山市方言の YORU と TORU からは (4) のような使い分けは観察されていないため、なぜ TORU と TERU の間のみでこのような使い分けが観察されているのかについても不明瞭である。

本稿では、岐阜方言の持続形式 YORU、TORU、TERU の意味機能を分析し、岐阜方言の持続体系および2形式の併用時における機能的対立について記述する。また、持続体系の相違と2

² NPST=non-past=非過去

形式の併用時における機能的対立の関係性について考察する。

2. 先行研究

本章では、岐阜方言の区画および西日本諸方言の持続形式が待遇的な意味を標示するという現象を記述した先行研究を挙げる。

2.1 岐阜方言の区画

岐阜県は、東側で長野県、西側で滋賀県・福井県、南側で愛知県・三重県、北側で富山県・石川県に隣接しており、東日本と西日本の接触地域として両者の特徴を持つ。総人口は約 200 万人であり、文化的中心部である岐阜市に総人口の約 20% が集中している。

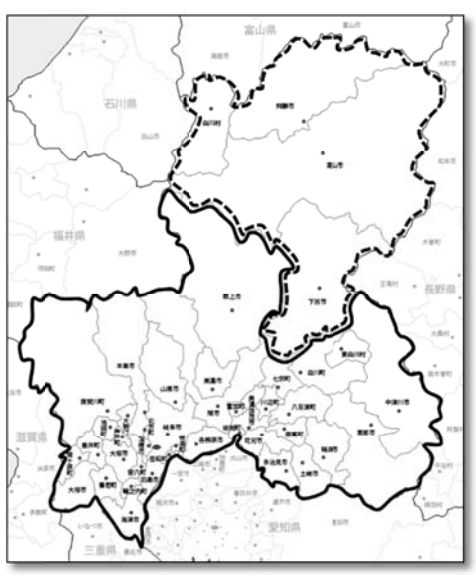


図3 岐阜方言の区画

岐阜方言は、アクセントに関しては東日本諸方言的であるが、音韻・文法・語彙に関しては西日本諸方言的であるという特徴を持っている。図3より、岐阜方言は、北部に位置する飛騨方言（破線枠内）と南部に位置する美濃方言（実線枠内）の2方言に区画されている。飛騨方言は、さらに北飛騨方言と南飛騨方言に下位区分されており、美濃方言は、さらに東濃方言、中濃方言、西濃方言に下位区分されている。（cf. 奥村 1976, 加藤 1983）

アスペクトに関して、山田（2002: 27-36）によれば、飛騨方言では、YORU と TORU の2形

式を使用して進行相と結果相のアスペクトを区別しているが、YORU の分布は南部になるほど少なくなっている。また、平山（1997: 26）によれば、美濃方言では、進行相、結果相ともに TORU の使用が中心であり、YORU と TORU の2形式によるアスペクトの区別は消滅の傾向にある。なお、TERU の使用に関しては、岐阜方言全体で報告がない。

本稿では、前述の方言区画を考慮しつつ、岐阜県全域を調査対象として網羅的に方言データの収集を行う。

2.2 持続形式の併用とポライトネス

西日本諸方言の持続形式がポライトネスを標示するという現象は、近畿中央部方言の YORU と TORU が持つマイナス待遇の意味を中心に数多く記述されている³。

近畿中央部方言の持続形式について記述した井上（1998: 154）によれば、大阪方言では、進行相上で TERU と TORU を併用する際、TORU の方は話し手のぞんざいな態度を標示するために使用される。（5a）は純粋に進行相を標示する際、（5b）は犬の鳴き声をうるさく思う際の大阪方言話者の発話である。

- (5) a. inu nai-te=(i)-ru
 犬 鳴く -TERU-NPST
 「犬（が）鳴いている」
- b. inu nai-tor-u.
 犬 鳴く -TORU-NPST
 「犬（が）鳴いている」

（5）より、ポライトネス上において、TERU は純粋に進行相を標示する [-ぞんざい] の無標形式であり、TORU は話し手のぞんざいな態度を標

³ 会話場面において、話し手と聞き手が互いに良好な関係を保つために行う言語的配慮のことをポライトネスという。形式によって標示される待遇の意味をポライトネスと定義する研究もあれば、話し手と聞き手の間で生じる配慮や距離感のように、形式によって標示されるとは限らない心的概念自体をポライトネスと定義する研究もあるため、ポライトネスという用語は広義にわたる。（cf. Brown & Levinson 1987）日本語研究では、丁寧語の「-ます」や敬語の「-られる」のようなプラス待遇のことをポライトネスと呼ぶことが多いが、本稿では、プラス待遇に限らず、卑語の「-やがる」や「-くさる」のようなマイナス待遇も含め、広く議論する上で、話し手の待遇的な態度をポライトネスと呼ぶ。

示する [+ぞんざい] の有標形式であるということが分かる。中井 (2012: 54-76) や西尾 (2015: 98-108) においても、近畿中央部方言では、進行相、結果相ともに TORU と TERU の使用が中心であり、TORU は、話し手と第三者との関係性や話し手の第三者への感情に基づいて卑罵的なポライトネスを標示する際に使用されることが指摘されている。また、近畿中央部方言の YORU は、他の西日本諸方言のように持続形式としては使用されておらず、卑語形式として使用されている。一方、近畿周辺部方言では、進行相、結果相ともに TORU の使用が中心であるが、近畿中央部方言の TORU のような卑罵的用法は観察されていない。

岡山方言の持続形式について記述した鴨井 (2021: 9-12) によれば、岡山方言では、進行相上で YORU と TORU を併用する際、TORU の方は聞き手に対する配慮を標示するために使用される。(6a) は仲の良いクラスメイト、(6b) は転校生に対する岡山方言話者の発話である。

- (6) a. taro: hasir-jo:r-u. / ?hasit-tor-u.
 太郎 走る -YORU-NPST / ?走る -TORU-NPST
 「太郎 (が) (今) 走っている」
- b. taro: hasit-tor-u. / ?hasir-jo:r-u.
 太郎 走る -TORU-NPST / ?走る -YORU-NPST
 「太郎 (が) (今) 走っている」

(6) より、ポライトネス上において、YORU は純粋に進行相を標示する [-配慮] の無標形式であり、TORU は聞き手に対する配慮を標示する [+配慮] の有標形式であるということが分かる。持続形式が第三者に対するマイナス待遇を標示するという現象に関しては豊富な研究蓄積があるが、聞き手に対する配慮を標示するという現象に関しては記述が少なく、持続形式が標示するポライトネスのバリエーションにおいても不明瞭である。

前述のような持続形式の併用時におけるポライトネス対立は、岐阜方言における YORU と TORU の併用時および TORU と TERU の併用時からも観察され得るだろうか。岐阜方言全体の持続体系とともに持続形式のポライトネス機能を詳細に記述する必要がある。

3. 研究方法

本章では、岐阜方言の持続形式について網羅的なデータ収集を行い、岐阜方言全体の持続体系とポライトネス対立の全体像を記述するための方法論を示す。

3.1 統一的枠組みの設定

本研究では、岐阜方言の持続体系を統一的枠組みに基づいて記述するために、2種類の命題の時間構造を設定する。まず、図4に示すように、進行相を持つ命題の時間構造は、開始兆候点 (signal of beginning=sb)、開始点、終了点、結果終了点 (result ending=re) という4つの参照点と将然相、進行相、結果相という3つのアスペクトから構成される。前述と同様、「太郎が魚を食べる」という命題は、時間の経過に伴い、太郎が食卓に着く (将然相) → 太郎が魚を咀嚼する (進行相) → 太郎が魚を食べ終え、魚の骨が残る (結果相) というような局面を経る。本稿では、このような時間構造を持つ命題を命題 α と呼ぶ⁴。

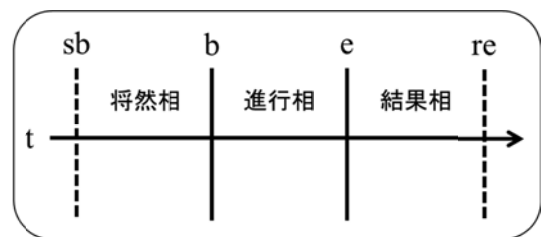


図4 命題 α の時間構造

次に、図5に示すように、進行相を持たない命題の時間構造は、開始兆候点、開始/終了点、結果終了点という3つの参照点と、将然相、結果相という2つのアスペクトから構成される。例えば「火が消える」という命題は、時間の経過に伴い、火が弱くなる (将然相) → 火が消え、煙が上る (結果相) というような局面を経る。本稿では、このような時間構造を持つ命題を命題 β と呼ぶ⁵。

⁴ 金田一 (1950) や Vendler (1967) の動詞分類から見れば、「走る」、「食べる」などの継続動詞 (activities) や「作る」、「焼く」などの達成動詞 (accomplishments) が命題 α の述語となる。

⁵ 金田一 (1950) や Vendler (1967) の動詞分類から見れば、「死ぬ」、「消える」などの瞬間動詞 (achievements) が命題 β の述語となる。また「ある」、「いる」などの状態動詞 (states) を述語とする命題は時間構造を持たない命題であるため、本稿では、持続形式との共起関係におけるデータ提示を割愛する。

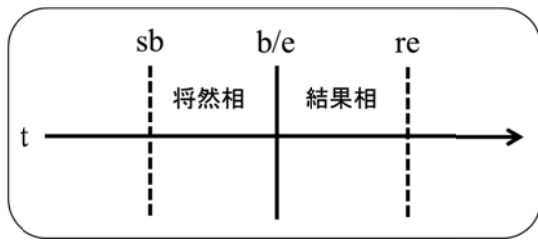


図5 命題βの時間構造

本稿では、前述の命題αと命題βにおいて、岐阜方言の持続形式 YORU、TORU、TERU がどのアスペクト上に生じ得るのかを記述し、岐阜方言全体の持続体系を明らかにする。

3.2 調査概要

本研究では、図6に示すように、方言Xの全体像（母集団）は、方言Xを母語とする地域および年齢層の話者（標本）によって特徴づけられると仮定する⁶。

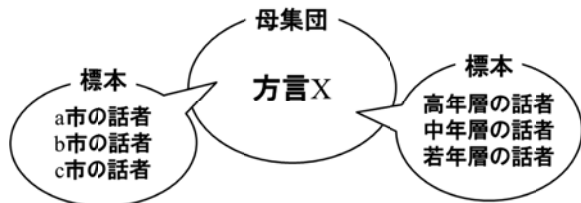


図6 方言Xと出身地・年齢層の関係

この方法論を採用すれば、地理的バリエーションと通時的バリエーションを考慮した上で岐阜方言の全体像を捉えることができる。

調査は、奥村（1976）、加藤（1983）の指摘と筆者の予備調査の結果に基づいて、次の5地域を出身地とする岐阜方言話者を対象に実施した。

[北飛騨地域] e.g. 飛騨市

[南飛騨地域] e.g. 高山市、下呂市

[東濃地域] e.g. 多治見市、恵那市、中津川市

[中濃地域] e.g. 岐阜市、各務原市、美濃市

[西濃地域] e.g. 大垣市、羽島市、養老郡

また、次の基準を満たす若年層（18-39歳）、中

⁶ 母集団と標本は集合と部分集合の関係にあり、標本には母集団の性質が反映されている。本研究における方言データの収集方法は、母集団から抽出した標本を分析することで母集団の性質を明らかにするという統計学的基础的な方法論より着想を得ている。

年層（40-69歳）、高年層（70歳以上）の話者を岐阜方言話者（インフォーマント）とし、各地区・各年齢層のインフォーマントに対して同様の質問項目を用いてインタビュー調査を行った。

[1-18歳までを調査対象の地域内で生活した]
[県外における外住歴が合計5年未満である]

インタビュー調査では、次のような各アスペクトと対応する個々の命題を合計40例ほど提示し、その命題において使用する形式を[YORU、TORU、TERU、その他]の中から複数選択させ回答を得た⁷。

[命題内容]

運動場に行くと、走っている最中の友人Aがいた。それを見ての発話。

[選択肢]

Aが、走りよる／走っとる／走ってる／その他

提示する命題の述語となる動詞は、金田一（1950）や工藤（1995）の動詞分類を参考に選定している。さらに、命題内容や聞き手の相違が形式選択に影響を及ぼすかについても詳細な回答を得た。

4. 岐阜方言の持続体系

本章では、統一的枠組みに基づいて網羅的に記述した岐阜方言の持続形式 YORU、TORU、TERU のアスペクト機能における調査結果を提示し、分析を行う。

まず、岐阜方言の地理的バリエーションについて、下位区分である北飛騨方言と南飛騨方言の間および東濃方言、中濃方言、西濃方言の間における方言差は観察されなかった。しかし、北部に位置する前者と南部に位置する後者の間における方言差は観察されたため、本稿では、前者の下位区分を統合して岐阜北部方言、後者の下位区分を統合して岐阜南部方言と呼び、2方言の異なる持続体系を記述する。

また、岐阜北部方言内と岐阜南部方言内の通時的バリエーションについて、若年層と中年層の間における方言差は観察されなかった。しかし、非

⁷ 調査時間は1件につき約2時間程度、調査期間は2019-2021年である。

高年層（若・中年層）と高年層の間における方言差は観察されたため、本稿では、2つの年齢層の異なる持続体系を記述する。

4.1 岐阜北部方言の持続体系

本節では、岐阜北部方言の持続形式のAspect機能における調査結果を提示する。なお、岐阜北部方言では、YORUとTORUの使用は観察されたが、TERUの使用は観察されなかった。

4.1.1 高年層における調査結果

命題αのAspect上において、高年層では、YORUが将然相と進行相、TORUが進行相と結果相を標示し得る。(7a)は将然相、(7b)は進行相、(7c)は結果相を標示する際の高年層話者の発話である。

- (7) a. taro: hasiri-jor-u. / *hasit-tor-u.
 太郎 走る -YORU-NPST / *走る -TORU-NPST
 「太郎 (が) 走ろうとしている」
- b. taro: hasiri-jor-u. / hasit-tor-u.
 太郎 走る -YORU-NPST / 走る -TORU-NPST
 「太郎 (が) (今) 走っている」
- c. taro: hasit-tor-u. / *hasiri-jor-u.
 太郎 走る -TORU-NPST / *走る -YORU-NPST
 「太郎 (が) (既に) 走っている」

(7) より、命題αのAspect上において、将然相と結果相を標示する際には両形式の対立が観察されるが、進行相を標示する際には両形式の併用が観察される。

次に、各命題における調査結果を一覧するため、集計表を提示する⁸。まず、表1は、命題αの将

表1 命題αの将然相における使用形式 (高年層)

[α] Proposition: PROSP	YO	TO	TE	n/a	info
【走る】運動場に行くと、スタートラインの手前で手首足首を回す、走る直前のAがいた	3				3
【食べる】食堂に行くと、テーブルに着いて箸と茶碗を持つ、食べる直前のAがいた	3				3
【焼く】台所に行くと、フライパンに油をひいて魚に手を付ける、焼く直前のAがいた	3				3
【書く】部屋に入ると、机の上に便箋を広げてペンを取り出す、書く直前のAがいた	3				3
【降る】カーテンを開けると、空が暗く曇っていて雨が降る直前の天気だった					6

⁸ 表中のYOは「YORU」、TOは「TORU」、TEは「TERU」、n/aは「その他」、infoは「インフォーマント」を表す。各表は各年齢層のインフォーマントが文法的に使用する形式を複数選択した結果を集計したものである。ここでは主語の属性を問わないため、主語をAとして提示する。

然相における使用形式の集計表である。表1のデータ数から見れば、将然相におけるYORUの使用については、半数のインフォーマントが容認しているため文法的ではあるものの、揺れがあるということが分かる。さらに、「雨が降る」のような自然現象の命題に関しては、いずれの形式も将然相を標示する機能を持たないということが分かる。次に、表2は、命題αの進行相における使用形式の集計表である。

表2 命題αの進行相における使用形式 (高年層)

[α] Proposition: PROG	YO	TO	TE	n/a	info
【走る】運動場に行くと、走っている最中のAがいた	6	6			6
【食べる】食堂に行くと、テーブルに着いてご飯を食べている最中のAがいた	6	6			
【焼く】台所に行くと、フライパンで魚を焼いている最中のAがいた	6	6			
【書く】部屋に入ると、手紙を書いている最中のAがいた	6	6			
【降る】カーテンを開けると、雨が降っている最中だった	6	6			

表2のデータ数から見れば、進行相におけるYORU、TORUの使用については、全てのインフォーマントが容認しているということが分かる。そして、表3は、命題αの結果相における使用形式の集計表である。

表3 命題αの結果相における使用形式 (高年層)

[α] Proposition: RES	YO	TO	TE	n/a	info
【走る】運動場に行くと、練習メニューである10周を走り終えて休憩しているAがいた		5			1
【食べる】食堂に行くと、既にご飯を食べ終えて食器を空にしているAがいた		6			6
【焼く】台所に行くと、既に焼き終えた魚をフライパンから皿に移しているAがいた		6			
【書く】部屋に入ると、既に書き終えた手紙を封筒に入れてAがいた		6			
【降る】カーテンを開けると、雨が降った跡があり、地面が濡れて水たまりができていた		5			1

表3のデータ数から見れば、結果相におけるTORUの使用については、ほぼ全てのインフォーマントが容認しているということが分かる。

次に、命題βのAspect上において、高年層では、YORUが将然相、TORUが結果相を標示し得る。(8a)は将然相、(8b)は結果相を標示する際の高年層話者の発話である。

- (8) a. taro: swari-jor-u. / *swat-tor-u.
 太郎 座る -YORU-NPST / *座る -TORU-NPST

「太郎 (が) 座ろうとしている」

b. taro: swat-tor-u. / *swari-jor-u.

太郎 座る -TORU-NPST / *座る -YORU-NPST

「太郎 (が) 座っている」

(8) より、命題βのアスペクト上において、将然相と結果相を標示する際には両形式の対立が観察される。

次に、各命題における調査結果を一覧するため、集計表を提示する。まず、表4は、命題βの将然相における使用形式の集計表である。

表4 命題βの将然相における使用形式 (高年層)

[β] Proposition: PROSP	YO	TO	TE	n/a	info
【座る】部屋に入ると、荷物を置いて椅子を引いた、座る直前のAがいた	6				6
【死ぬ】道路を歩いていると、痙攣して死ぬ直前のネズミがいた	6				
【消える】部屋に入ると、火が小さくなって消える直前のロウソクがあった	6				
【消す】部屋に入ると、スイッチに手を伸ばしてストーブの火を消す直前のAがいた	6				
【晴れる】カーテンを開けると、空を覆っていた雲が掃けていき、太陽が見え始めた	6				

表4のデータ数から見れば、将然相におけるYORUの使用については、全てのインフォーマントが容認しているということが分かる。次に、表5は、命題βの結果相における使用形式の集計表である。

表5 命題βの結果相における使用形式 (高年層)

[β] Proposition: RES	YO	TO	TE	n/a	info
【座る】部屋に入ると、椅子に座っているAがいた		6			6
【死ぬ】道路を歩いていると、既に死んでいるネズミがいた		6			
【消える】部屋に入ると、さっきまで点いていたロウソクの火が既に消えていた		6			
【消す】部屋に入ると、ストーブの火を消し終えて部屋を換気しているAがいた		6			
【晴れる】カーテンを開けると、曇ひとつない青空が広がっていた		6			

表5のデータ数から見れば、結果相におけるTORUの使用については、全てのインフォーマントが容認しているということが分かる。

以上の方言データより、岐阜北部方言の高年層における持続体系は、図7、図8のようになると分析できる。

YORUの将然相を標示するアスペクト機能においては、命題αの方で揺れが観察されたことから、

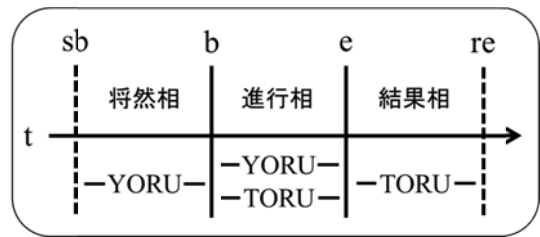


図7 命題αにおける持続体系 (高年層)

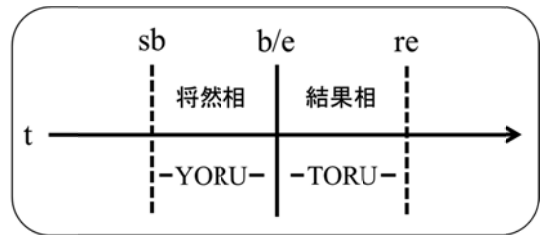


図8 命題βにおける持続体系 (高年層)

命題αにおいては進行相を標示するアスペクト機能の方が基本であると考えられる。

4. 1. 2 非高年層における調査結果

命題αのアスペクト上において、高年層と同様、非高年層でも、YORUが将然相と進行相、TORUが進行相と結果相を標示し得る。ただし、「Aが走る」という命題の将然相におけるYORUの使用については、容認度が低かった。(9a)は将然相、(9b)は進行相、(9c)は結果相を標示する際の非高年層話者の発話である。

(9) a. taro: ?hasiri-jor-u. / *hasit-tor-u.

太郎?走る -YORU-NPST / *走る -TORU-NPST
「太郎 (が) 走ろうとしている」

b. taro: hasiri-jor-u. / hasit-tor-u.

太郎 走る -YORU-NPST / 走る -TORU-NPST
「太郎 (が) (今) 走っている」

c. taro: hasit-tor-u. / *hasiri-jor-u.

太郎 走る -TORU-NPST / *走る -YORU-NPST
「太郎 (が) (既に) 走っている」

(9) より、命題αのアスペクト上において、将然相と結果相を標示する際には両形式の対立が観察されるが、進行相を標示する際には両形式の併用が観察される。

次に、各命題における調査結果を一覧するため、集計表を提示する。まず、表6は、命題αの将然相における使用形式の集計表である。

表6 命題 α の将然相における使用形式 (非高年層)

[α] Proposition: PROSP	YO	TO	TE	n/a	info
【走る】運動場に行くと、スタートラインの手前で手首足首を回す、走る直前のAがいた	2				7
【食べる】食堂に行くと、テーブルに着いて箸と茶碗を持つ、食べる直前のAがいた	2				7
【焼く】台所に行くと、フライパンに油をひいて魚に手を付ける、焼く直前のAがいた	5				4
【書く】部屋に入ると、机の上に便箋を広げてペンを取り出す、書く直前のAがいた	2				7
【降る】カーテンを開けると、空が暗く曇っていて雨が降る直前の天気だった	2				7

表6のデータ数から見れば、将然相におけるYORUの使用については、半数以上のインフォーマントが容認していないということが分かる。一方、「Aが魚を焼く」のような主体動作客体変化(工藤1995)の性質を持つ命題に関しては、半数以上のインフォーマントが容認しているということが分かる。次に、表7は、命題 α の進行相における使用形式の集計表である。

表7 命題 α の進行相における使用形式 (非高年層)

[α] Proposition: PROG	YO	TO	TE	n/a	info
【走る】運動場に行くと、走っている最中のAがいた	7	9			
【食べる】食堂に行くと、テーブルに着いてご飯を食べている最中のAがいた	7	9			
【焼く】台所に行くと、フライパンで魚を焼いている最中のAがいた	7	9			9
【書く】部屋に入ると、手紙を書いている最中のAがいた	7	9			
【降る】カーテンを開けると、雨が降っている最中だった	7	9			

表7のデータ数から見れば、進行相におけるYORU、TORUの使用については、ほぼ全てのインフォーマントが容認しているということが分かる。しかし、高年層と異なり、非高年層では、進行相におけるYORUの使用について、容認度が下がっているということが分かる。そして、表8は、命題 α の結果相における使用形式の集計表である。

表8 命題 α の結果相における使用形式 (非高年層)

[α] Proposition: RES	YO	TO	TE	n/a	info
【走る】運動場に行くと、練習メニューである10周を走り終えて休憩しているAがいた		6			3
【食べる】食堂に行くと、既にご飯を食べ終えて食器を空にしているAがいた		9			
【焼く】台所に行くと、既に焼き終えた魚をフライパンから皿に移しているAがいた		9			9
【書く】部屋に入ると、既に書き終えた手紙を封筒に入れていくAがいた		9			
【降る】カーテンを開けると、雨が降った跡があり、地面が濡れて水たまりができていた		8			1

表8のデータ数から見れば、結果相におけるTORUの使用については、ほぼ全てのインフォーマントが容認しているということが分かる。

次に、命題 β のアスペクト上において、非高年層では、YORUが将然相、TORUが結果相を標示し得る。(10a)は将然相、(10b)は結果相を標示する際の非高年層話者の発話である。

(10) a. taro: swari-jor-u. / *swat-tor-u.

太郎 座る -YORU-NPST / *座る -TORU-NPST
「太郎 (が) 座ろうとしている」

b. taro: swat-tor-u. / *swari-jor-u.

太郎 座る -TORU-NPST / *座る -YORU-NPST
「太郎 (が) 座っている」

(10) より、命題 β のアスペクト上において、将然相と結果相を標示する際には両形式の対立が観察される。

次に、各命題における調査結果を一覧するため、集計表を提示する。まず、表9は、命題 β の将然相における使用形式の集計表である。

表9 命題 β の将然相における使用形式 (非高年層)

[β] Proposition: PROSP	YO	TO	TE	n/a	info
【座る】部屋に入ると、荷物を置いて椅子を引いた、座る直前のAがいた	6				3
【死ぬ】道路を歩いていると、痙攣して死ぬ直前のネズミがいた	5				4
【消える】部屋に入ると、火が小さくなって消える直前のロウソクがあった	5				4
【消す】部屋に入ると、スイッチに手を伸ばしてストーブの火を消す直前のAがいた	7				2
【晴れる】カーテンを開けると、空を覆っていた雲が掃けていき、太陽が見え始めた	5				4

表9のデータ数から見れば、将然相におけるYORUの使用については、半数以上のインフォーマントが容認しているため文法的ではあるものの、揺れがあるということが分かる。また、高年層と異なり、非高年層では、将然相におけるYORUの使用について、容認度が下がっているということが分かる。次に、表10は、命題 β の結果相における使用形式の集計表である。

表10のデータ数から見れば、結果相におけるTORUの使用については、全てのインフォーマントが容認しているということが分かる。

以上の方言データより、岐阜北部方言の非高年層における持続体系は、高年層における持続体系と類似しているが、高年層よりもYORUの容認

表 10 命題βの結果相における使用形式 (非高年層)

[β] Proposition: RES	YO	TO	TE	n/a	info
【座る】部屋に入ると、椅子に座っているAがいた		9			9
【死ぬ】道路を歩いていると、既に死んでいるネズミがいた		9			
【消える】部屋に入ると、さっきまで点いていたロウソクの火が既に消えていた		9			
【消す】部屋に入ると、ストーブの火を消し終えて部屋を換気しているAがいた		9			
【晴れる】カーテンを開けると、雲ひとつない青空が広がっていた		9			

度が下がっているという点で、図9、図10のようになると分析できる。

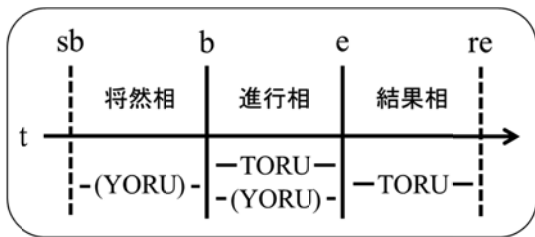


図9 命題αにおける持続体系 (非高年層)

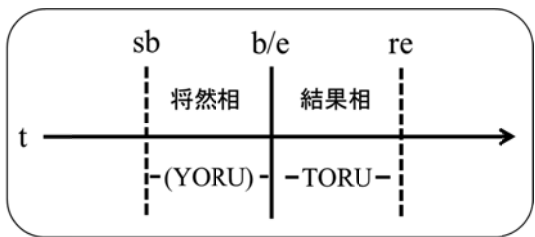


図10 命題βにおける持続体系 (非高年層)

方言の通時的変化プロセスが高年層→非高年層という順序であれば、岐阜北部方言においては、持続体系の中で YORU の衰退が生じていると考えられる。また、この事実は、従来の研究において指摘されている TORU への一本化 (工藤 2014) を支持している。

4.2 岐阜南部方言の持続体系

本節では、岐阜南部方言の持続形式のAspect機能における調査結果を提示する。なお、岐阜南部方言では、TORU と TERU の使用は観察されたが、YORU の使用は観察されなかった⁹。そ

⁹TERU の使用については、インタビュー調査時、標準語としてではなく、自身の方言として容認するかどうかということに十分留意した。

れに伴い、将然相においては、いずれの形式も使用されず、標準語と同様、動詞現在形が使用されているため、本節では、将然相におけるデータの提示を割愛する。

4.2.1 高年層における調査結果

命題αのAspect上において、高年層では、TORU が進行相と結果相を標示し得る。ただし、「A が走る」という命題の結果相における TORU の使用については、容認度が低かった。(11a) は進行相、(11b) は結果相を標示する際の高年層話者の発話である。

(11) a. taro: hasit-tor-u. / *hasit-te=(i)-ru.

太郎 走る -TORU-NPST / *走る -TERU-NPST
「太郎 (が) (今) 走っている」

b. taro: ?hasit-tor-u. / *hasit-te=(i)-ru.

太郎 ?走る -TORU-NPST / *走る -TERU-NPST
「太郎 (が) (既に) 走っている」

(11) より、命題αのAspect上において、進行相を標示する際には、TORU の使用が観察されるが、結果相を標示する際には、TORU の使用に揺れが生じる。

次に、各命題における調査結果を一覧するため、集計表を提示する。まず、表11は、命題αの進行相における使用形式の集計表である。

表 11 命題αの進行相における使用形式 (高年層)

[α] Proposition: PROG	YO	TO	TE	n/a	info
【走る】運動場に行くと、走っている最中のAがいた		8			8
【食べる】食堂に行くと、テーブルに着いてご飯を食べている最中のAがいた		8			
【焼く】台所に行くと、フライパンで魚を焼いている最中のAがいた		8			
【書く】部屋に入ると、手紙を書いている最中のAがいた		8			
【降る】カーテンを開けると、雨が降っている最中だった		8			

表11のデータ数から見れば、進行相におけるTORUの使用については、全てのインフォーマントが容認しているということが分かる。次に、表12は、命題αの結果相における使用形式の集計表である。

表12のデータ数から見れば、結果相におけるTORUの使用については、大体、半数のインフォーマントが容認しているため文法的ではあるもの

表 12 命題 α の結果相における使用形式 (高年層)

[α] Proposition: RES	YO	TO	TE	n/a	info
【走る】運動場に行くと、練習メニューである10周を走り終えて休憩しているAがいた		2		6	8
【食べる】食堂に行くと、既にご飯を食べ終えて食器を空にしているAがいた		4		4	
【焼く】台所に行くと、既に焼き終えた魚をフライパンから皿に移しているAがいた		2		6	
【書く】部屋に入ると、既に書き終えた手紙を封筒に入れているAがいた		4		4	
【降る】カーテンを開けると、雨が降った跡があり、地面が濡れて水たまりができていた		4		4	

の、揺れがあるということが分かる。

次に、命題 β の観点上において、高年層では、TORUが結果相を標示し得る。(12)は結果相を標示する際の高年層話者の発話である。

(12) taro: swat-tor-u. / *swat-te=(i)-ru.

太郎 座る -TORU-NPST / *座る -TERU-NPST
「太郎 (が) 座っている」

(12) より、命題 β の観点上において、結果相を標示する際には、TORUの使用が観察される。

次に、各命題における調査結果を一覧するため、集計表を提示する。表 13は、命題 β の結果相における使用形式の集計表である。

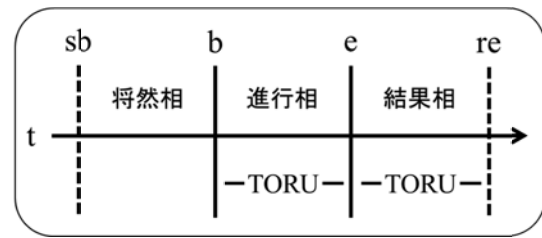
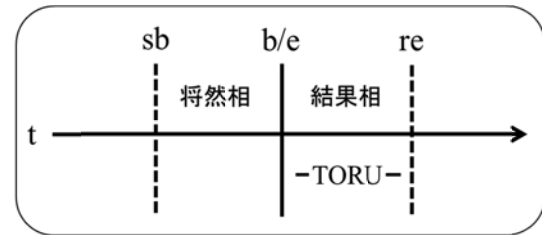
表 13 命題 β の結果相における使用形式 (高年層)

[β] Proposition: RES	YO	TO	TE	n/a	info
【座る】部屋に入ると、椅子に座っているAがいた		8			8
【死ぬ】道路を歩いていると、既に死んでいるネズミがいた		8			
【消える】部屋に入ると、さっきまで点いていたろうソクの火が既に消えていた		8			
【消す】部屋に入ると、ストーブの火を消し終えて部屋を換気しているAがいた		4		4	
【晴れる】カーテンを開けると、曇ひとつない青空が広がっていた		8			

表 13 のデータ数から見れば、結果相における TORU の使用については、ほぼ全てのインフォーマントが容認しているということが分かる。一方、「A が火を消す」のような主体動作客体変化の性質を持つ命題に関しては、半数のインフォーマントが容認していないということが分かる。

以上の方言データより、岐阜南部方言の高年層における持続体系は、図 11、図 12 のようになると分析できる。

TORU の結果相を標示するアスペクト機能にお

図 11 命題 α における持続体系 (高年層)図 12 命題 β における持続体系 (高年層)

いては、命題 α の方で揺れが観察されたことから、命題 α においては進行相を標示するアスペクト機能の方が基本であると考えられる。

4.2.2 非高年層における調査結果

命題 α の観点上において、非高年層では、TORU と TERU の両形式が進行相と結果相を標示し得る。ただし、「A が走る」という命題の結果相における両形式の使用については、容認度が低かった。(13a)は進行相、(13b)は結果相を標示する際の高年層話者の発話である。

(13) a. taro: hasit-tor-u. / hasit-te=(i)-ru.

太郎 走る -TORU-NPST / 走る -TERU-NPST
「太郎 (が) (今) 走っている」

b. taro: ?hasit-tor-u. / ?hasit-te=(i)-ru.

太郎 ?走る -TORU-NPST / ?走る -TERU-NPST
「太郎 (が) (既に) 走っている」

(13) より、命題 α の観点上において、進行相を標示する際には、TORU と TERU の使用が観察されるが、結果相を標示する際には、TORU と TERU の使用に揺れが生じる。

次に、各命題における調査結果を一覧するため、集計表を提示する。まず、表 14は、命題 α の進行相における使用形式の集計表である。

表 14 のデータ数から見れば、進行相における TORU の使用については、全てのインフォーマントが容認しているということが分かる。一方、

表 14 命題αの進行相における使用形式(非高年層)

[α] Proposition: PROG	YO	TO	TE	n/a	info
【走る】運動場に行くと、走っている最中のAがいた		21	7		21
【食べる】食堂に行くと、テーブルに着いてご飯を食べている最中のAがいた		21	9		
【焼く】台所に行くと、フライパンで魚を焼いている最中のAがいた		21	9		
【書く】部屋に入ると、手紙を書いている最中のAがいた		21	9		
【降る】カーテンを開けると、雨が降っている最中だった		21	8		

表 15 命題αの結果相における使用形式(非高年層)

[α] Proposition: RES	YO	TO	TE	n/a	info
【走る】運動場に行くと、練習メニューである10周を走り終えて休憩しているAがいた		9	3	12	21
【食べる】食堂に行くと、既にご飯を食べ終えて食器を空にしているAがいた		18	5	3	
【焼く】台所に行くと、既に焼き終えた魚をフライパンから皿に移しているAがいた		7		14	
【書く】部屋に入ると、既に書き終えた手紙を封筒に入れてあるAがいた		18	5	3	
【降る】カーテンを開けると、雨が降った跡があり、地面が濡れて水たまりができていた		15	3	6	

高年層と異なり、非高年層では、半数以下ではあるものの、TERUの使用も容認しているということが分かる。次に、表 15 は、命題αの結果相における使用形式の集計表である。

表 15 のデータ数から見れば、結果相における TORU の使用については、大体、半数以上のインフォーマントが容認しているため文法的ではあるものの、揺れがあるということが分かる。一方、高年層と異なり、非高年層では、半数以下ではあるものの、TERU の使用も容認しているということが分かる。

次に、命題βのアスペクト上において、非高年層では、TORU が結果相を標示し得る。(14) は結果相を標示する際の非高年層話者の発話である。

- (14) taro: swat-tor-u. / swat-te=(i)-ru.
 太郎 座る -TORU-NPST / 座る -TERU-NPST
 「太郎(が)座っている」

(14) より、命題βのアスペクト上において、結果相を標示する際には、TORU と TERU の使用が観察される。

次に、各命題における調査結果を一覧するため、集計表を提示する。表 16 は、命題βの結果相における使用形式の集計表である。

表 16 のデータ数から見れば、結果相における

表 16 命題βの結果相における使用形式(非高年層)

[β] Proposition: RES	YO	TO	TE	n/a	info
【座る】部屋に入ると、椅子に座っているAがいた		21	11		21
【死ぬ】道路を歩いていると、既に死んでいるネズミがいた		21	11		
【消える】部屋に入ると、さっきまで点いていたロウソクの火が既に消えていた		21	9		
【消す】部屋に入ると、ストーブの火を消し終えて部屋を換気しているAがいた		10	3	11	
【晴れる】カーテンを開けると、曇ひとつない青空が広がっていた		21	9		

TORU の使用については、ほぼ全てのインフォーマントが容認しているということが分かる。一方、「A が火を消す」のような主動作客体変化の性質を持つ命題に関しては、半数のインフォーマントが容認していないということが分かる。また、高年層と異なり、非高年層では、大体、半数のインフォーマントが、TERU の使用も容認しているということが分かる。

以上の方言データより、岐阜南部方言の非高年層における持続体系は、高年層における持続体系と類似しているが、高年層よりも TERU の使用が観察されているという点で、図 13、図 14 のようになると分析できる。

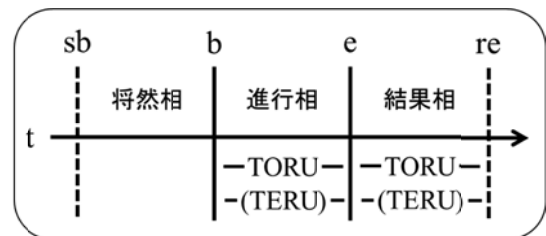


図 13 命題αにおける持続体系(非高年層)

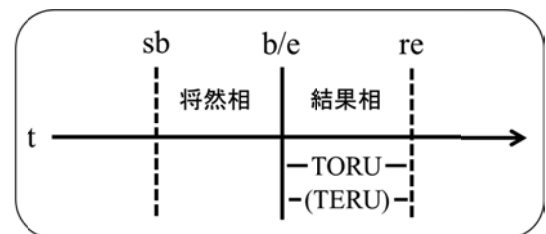


図 14 命題βにおける持続体系(非高年層)

前述と同様、方言の通時的変化プロセスが高年層→非高年層という順序であれば、岐阜南部方言においては、持続体系の中で TERU の導入が生じていると考えられる。

4.3 持続体系の変遷について

本節では、前述の方言データに基づき、岐阜方言の持続体系の変遷について考察を行う。統一的枠組みに基づいて記述した方言データより、岐阜方言全体における持続体系では、TORU を持続形式の中心として、YORU の衰退と TERU の導入が生じていると考えられる。

また、岐阜南部方言に隣接している愛知尾張方言では、TORU と TERU の併用が観察された。(15a) は進行相、(15b) は結果相を標示する際の尾張方言話者の発話である。

(15) a. taro: hasit-tor-u. / hasit-te=(i)-ru.

太郎 走る -TORU-NPST / 走る -TERU-NPST
「太郎 (が) (今) 走っている」

b. taro: hasit-tor-u. / hasit-te=(i)-ru.

太郎 走る -TORU-NPST / 走る -TERU-NPST
「太郎 (が) (既に) 走っている」

隣接分布の原則 (柴田 1969) より、東海諸方言の伝播が、東海地方の文化的中心地である愛知県名古屋市→岐阜南部→岐阜北部という順序である

ことと、方言の通時的変化プロセスが高年層→非高年層という順序であることを総合的に分析すれば、岐阜方言の持続体系の変遷は図 15、図 16 のようになると推測できる。

図 15、図 16 より、岐阜方言における持続体系の変遷では、従来は、西日本諸方言のように、YORU と TORU の 2 形式が使用されていたが、将然相・進行相を標示する YORU の衰退に伴い、TORU が持続形式の中心として一般化したと分析できる。さらに、近年では、尾張方言の影響を受け、TERU の導入が生じていると考えられる。今後は、TERU が岐阜方言の持続形式として一般化し、尾張方言と同様の持続体系になることが推測される。

岐阜方言の持続体系の変遷について、進行相では、YORU から TORU への移行があるため、依然として進行相を標示する形式は存在していることになるが、将然相においては、YORU の消滅があるため、将然相を標示する際は、標準語と同様、動詞現在形を使用することになる。岐阜方言の持続形式と持続体系を総合的に見れば、使用する持続形式は、TORU が中心であるという点で

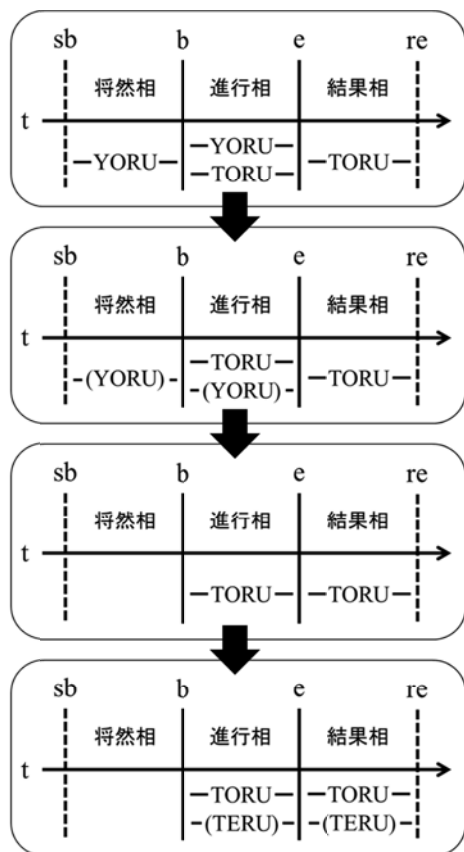


図 15 岐阜方言における持続体系の変遷 (命題 α)

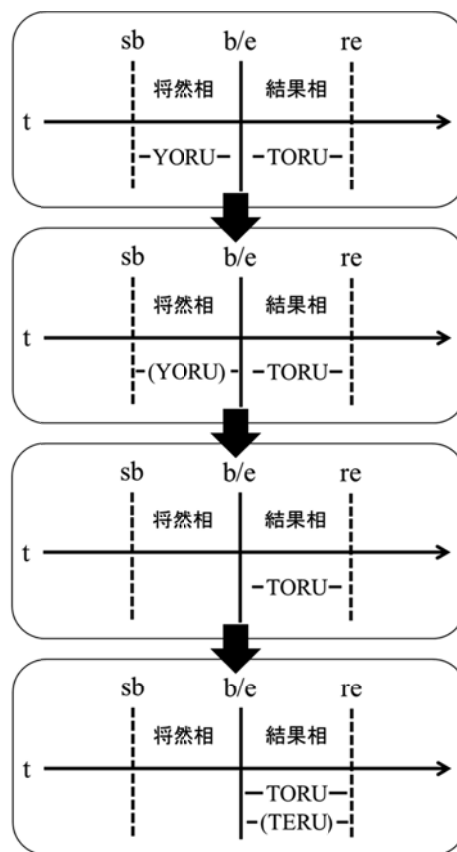


図 16 岐阜方言における持続体系の変遷 (命題 β)

西日本諸方言的な傾向があるが、持続体系は、1形式が進行相と結果相を標示するという点で東日本諸方言的な傾向があると言える。

5. 岐阜方言の持続形式におけるポライトネス

本章では、持続形式が同じアスペクト上で併用される際のポライトネス対立における調査結果を提示する。持続形式のポライトネス機能における調査は、進行相で YORU と TORU を併用すると回答した岐阜北部方言のインフォーマントおよび進行相と結果相で TORU と TERU を併用すると回答した岐阜南部方言のインフォーマントに対して実施した¹⁰。

5.1 TORU と TERU のポライトネス対立

進行相で YORU と TORU を併用する岐阜北部方言では、両形式の間で、ポライトネス上の対立は観察されなかった。両形式を併用する高年層・非高年層のインフォーマント13名の内省によれば、TORUの方が使用頻度は高く、命題内容や聞き手の相違による制限を受けない。この事実は、岐阜北部方言における YORU の衰退とも一致する。

一方、進行相と結果相で TORU と TERU を併用する岐阜南部方言では、聞き手が話し手の親近者である場合には TORU が使用され、聞き手が話し手の疎遠者である場合には TERU が使用されるというポライトネス上の対立が観察された¹¹。命題 a において進行相を標示する際、(16a) は親近者、(16b) は疎遠者に対する岐阜南部方言の非高年層話者の発話である。

(16) a. taro: hasit-tor-u. / ?hasit-te=(i)-ru.

太郎 走る -TORU-NPST / ?走る -TERU-NPST
「太郎 (が) (今) 走っている」

b. taro: hasit-te=(i)-ru. / ?hasit-tor-u.

太郎 走る -TERU-NPST / ?走る -TORU-NPST
「太郎 (が) (今) 走っている」

同様に、結果相を標示する際、(17a) は親近者、(17b) は疎遠者に対する岐阜南部方言の非高年層話者の発話である。

(17) a. taro: hasit-tor-u. / ?hasit-te=(i)-ru.

太郎 走る -TORU-NPST / ?走る -TERU-NPST
「太郎 (が) (既に) 走っている」

b. taro: hasit-te=(i)-ru. / ?hasit-tor-u.

太郎 走る -TERU-NPST / ?走る -TORU-NPST
「太郎 (が) (既に) 走っている」

(16)、(17) より、ポライトネス上において、TORU は純粋に進行相と結果相を標示する [-配慮] の無標形式であり、TERU は聞き手に対する配慮を標示する [+配慮] の有標形式であるということが分かる。

次に、各命題における調査結果を一覧するため、集計表を提示する。進行相を標示する際、表 17 は聞き手が親近者、表 18 は聞き手が疎遠者の場合における使用形式の集計表である¹²。

表 17 命題 a の進行相 [-配慮] における使用形式

[a] Proposition: PROG	YO	TO	TE	n/a	info
【走る】運動場に行くと、走っている最中の A がいた		7			7
【食べる】食堂に行くと、テーブルに着いてご飯を食べている最中の A がいた		9			9
【焼く】台所に行くと、フライパンで魚を焼いている最中の A がいた		9			9
【書く】部屋に入ると、手紙を書いている最中の A がいた		9			9
【降る】カーテンを開けると、雨が降っている最中だった		8			8

表 18 命題 a の進行相 [+配慮] における使用形式

[a] Proposition: PROG	YO	TO	TE	n/a	info
【走る】運動場に行くと、走っている最中の A がいた			7		7
【食べる】食堂に行くと、テーブルに着いてご飯を食べている最中の A がいた			9		9
【焼く】台所に行くと、フライパンで魚を焼いている最中の A がいた			9		9
【書く】部屋に入ると、手紙を書いている最中の A がいた			9		9
【降る】カーテンを開けると、雨が降っている最中だった			8		8

表 17、表 18 のデータ数から見れば、進行相を標示する際、[-配慮] の場面であれば TORU が使用され、[+配慮] の場面であれば TERU が使用

¹⁰ 2形式を併用せず、どちらか一方の形式のみを使用すると回答したインフォーマントおよびいずれの形式も使用しないと回答したインフォーマントに関しては、ここでの調査の対象外となっている。

¹¹ 親近者とは、話し手と親密度の高い人物 (e.g. 友人、幼馴染、家族) のことを指し、疎遠者とは、話し手と親密度の低い人物 (e.g. 知人、転校生、遠い親戚) のことを指す。

¹² 表 17 以降は、2形式を併用するインフォーマントに対して追加調査を行った結果である。命題内容によっては併用の有無に多少の差異があるため、インフォーマントの総数は各命題により異なる。

されるということが分かる。次に、結果相を標示する際、表 19 は聞き手が親近者、表 20 は聞き手が疎遠者の場合における使用形式の集計表である。

表 19 命題αの結果相 [-配慮] における使用形式

[α] Proposition: RES	YO	TO	TE	n/a	info
【走る】運動場に行くと、練習メニューである10周を走り終えて休憩しているAがいた			3		3
【食べる】食堂に行くと、既にご飯を食べ終えて食器を空にしているAがいた			5		5
【焼く】台所に行くと、既に焼き終えた魚をフライパンから皿に移しているAがいた					
【書く】部屋に入ると、既に書き終えた手紙を封筒に入れているAがいた			5		5
【降る】カーテンを開けると、雨が降った跡があり、地面が濡れて水たまりができていた			3		3

表 20 命題αの結果相 [+配慮] における使用形式

[α] Proposition: RES	YO	TO	TE	n/a	info
【走る】運動場に行くと、練習メニューである10周を走り終えて休憩しているAがいた			3		3
【食べる】食堂に行くと、既にご飯を食べ終えて食器を空にしているAがいた			5		5
【焼く】台所に行くと、既に焼き終えた魚をフライパンから皿に移しているAがいた					
【書く】部屋に入ると、既に書き終えた手紙を封筒に入れているAがいた			5		5
【降る】カーテンを開けると、雨が降った跡があり、地面が濡れて水たまりができていた			3		5

表 19、表 20 のデータ数から見れば、進行相と同様、結果相を標示する際、[-配慮] の場面であれば TORU が使用され、[+配慮] の場面であれば TERU が使用されるということが分かる。なお、命題βの結果相においても同様のポライトネス対立が観察されたが、命題αの調査結果と同様であるため、データの提示は割愛する。

5.2 持続体系とポライトネス対立の関係

図 15 の進行相から見れば、岐阜方言の持続形式は、YORU → TORU → TERU の順に変遷していく可能性があると言える。岐阜方言では、持続形式の変遷に伴い、同じアスペクト上で 2 形式が併用されているが、併用時にポライトネス上の対立が生じるのは TORU と TERU の間のみである。

これについて、本稿では、真田 (2007) が提案した発話スタイル仮説に基づいて考察を行う。真田 (2007: 1-13) によれば、方言話者の発話スタイルには、伝統方言のようにカジュアルな場面で使用される Low コードと、標準語のようにフォーマルな場面で使用される High コードがある。方言話者は、場面に応じて 2 つのコードを切り替える (コードスイッチング) という発話スタイルを形成している。また、図 17 に示すように、

伝統方言と標準語が接触することで、ネオ方言のような中間的なスタイルも生じる。

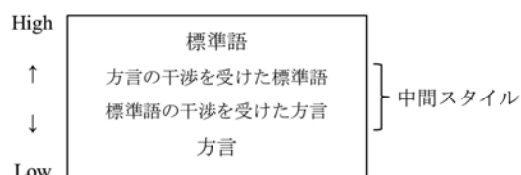


図 17 発話スタイル体系 (真田 2007: 3)

本稿では、コードスイッチングは、方言と標準語の間に限らず、方言とネオ方言の間でも行われるのではないかと考える。前述した岐阜方言の持続体系の変遷から見れば、少なくとも、TERU は岐阜方言における非伝統方言形式であるということが分かる。ここで、同じアスペクト上で 2 形式を併用する際にポライトネス上の対立が生じる TORU と TERU に注目する。TORU を伝統方言形式、TERU をネオ方言形式であると仮定すると、持続体系における次のような発話スタイル体系が想定される。

(18) a. High コード

進行相 -TERU · 結果相 -TERU

b. Low コード

進行相 -TORU · 結果相 -TORU

(18) の分析が妥当であれば、TORU は配慮の必要がない親近者と会話するようなカジュアルな場面で使用され、TERU は配慮の必要がある疎遠者と会話するようなフォーマルな場面で使用されるということになる。つまり、同じアスペクト上で TORU と TERU が併用される際に生じる、TORU [-配慮]、TERU [+配慮] のポライトネス対立は、当該方言話者の発話スタイルにおける High コードへのコードスイッチングによるものであると考えられる。

一方、同じアスペクト上で併用されているにも関わらず、YORU と TORU の間にポライトネス対立が生じないのは、両形式ともに Low コードであり、コードスイッチング自体が行われていないためであると考えられる。また、このことは、持続形式のアスペクトの意味から派生的にポライトネスが生じたのではないということを示唆しているが、これについては今後の課題とする。

6. おわりに

本稿では、岐阜方言の持続形式 YORU、TORU、TERU のアスペクト機能を分析し、岐阜方言全体の持続体系を記述した。また、岐阜方言の持続体系の変遷において、YORU の衰退と TERU の導入が生じていることを明らかにした。なお、TORU と TERU が同じアスペクト上で併用される際には、TORU は聞き手への [-配慮]、TERU は聞き手への [+配慮] を標示するというポライトネス上の対立が生じている。

最後に、岐阜方言の持続体系においては、西日本諸方言の持続形式である YORU・TORU と東日本諸方言の持続形式である TERU の両者が観察されたが、YORU の衰退と TERU の導入の動機については依然として不明瞭である。なぜ、岐阜方言においては、YORU と TORU の間では一方の形式が衰退するのに対し、TORU と TERU の間では新たにポライトネス機能が生じるのだろうか。今後は、隣接する諸方言の記述と方言間の比較対照を行うことで、持続体系の変遷とポライトネス対立の詳細を明らかにする必要がある。

謝 辞

本稿を執筆するにあたり、多くの岐阜方言母語話者の方々に多大なるご協力を賜りました。ここに記して心より感謝申し上げます。

参考文献

- Brown, P. & S. C. Levinson (1987) *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Comrie, Bernard (1976) *Aspect*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 平山輝男 (編) (1997) 『岐阜県のことば』東京: 明治書院.
- 井上文子 (1998) 『日本語方言アスペクトの動態—存在型表現形式に焦点をあてて—』東京: 秋山書店.
- 鴨井修平 (2021) 「方言データから見た岡山方言のアスペクト形式—YORU と TORU の通時的变化について—」『文化情報学』16 (1・2), 1-13. 同志社大学文化情報学会.
- 加藤毅 (1983) 「岐阜県の方言」『講座方言学 6 中部地方の方言』177-206. 東京: 国書刊行会.
- 金田一春彦 (1950) 「国語動詞の一分類」『言語研究』15, 48-63. 日本言語学会.
- 国立国語研究所 (編) (1999) 『方言文法全国地図 第 4

- 集 表現法編 1』東京: 財務省印刷局.
- 工藤真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現—』東京: ひつじ書房.
- 工藤真由美 (2014) 『現代日本語ムード・テンス・アスペクト論』東京: ひつじ書房.
- 中井精一 (2012) 『都市言語の形成と地域特性』大阪: 和泉書院.
- 西尾純二 (2015) 『マイナスの待遇表現行動 対象を低く悪く扱う表現への規制と配慮』東京: くろしお出版.
- 奥田靖雄 (1978) 「アスペクトの研究をめぐって (上)」『教育国語』53, 33-44. 東京: むぎ書房.
- 奥田靖雄 (1978) 「アスペクトの研究をめぐって (下)」『教育国語』54, 14-27. 東京: むぎ書房.
- 奥村三雄 (編) (1976) 『岐阜県方言の研究』岐阜: 大衆書房.
- 真田信治 (2007) 「発話スタイルと方言」『シリーズ方言学 3 方言の機能』1-25. 東京: 岩波書店.
- 柴田武 (1969) 『言語地理学の方法』東京: 筑摩書房.
- Vendler, Zeno (1967) *Linguistics in Philosophy*. New York: Cornell University Press.
- 山田敏弘 (2002) 『ぎふ・ことばの研究ノート 第 1 集 飛騨方言資料に見られる文法項目』研究成果報告書.